

# ネットワークの記憶を紡ぐ

西田亮介  
*Shinya Sugawara*

二〇一二年三月二日、未曾有の大震災が東北を襲った。それから三カ月がたち、いまや歴史にその名を刻むことが確定的となった。いつしか首都圏では大きな余震も収まり、特番態勢もほぼ終息した。しかし最近になって次々に露呈する当初見積もりをはるかにこえる被害の発覚は、公開情報が信じるに足るものかという判断さえ難しくしている。地震と原発の安全性、放射性物質に関わる情報量が爆発しひとびとを半強制的に判断停止に追い込んでいるようにも見える。

国内の主要な観光地や、つい半年前まで諸外国からの観光客でごった返していた都内の百貨店では、未だ閑古鳥が鳴いており、陳列が回復したはずのスーパーの食品棚もよくよく見ると、先日まで国内産が当たり前だった商品の産地が海外産に置き換わっている。このように薄皮一枚はがすと確実に今までとは異なった基層が姿を現しており、「日常回帰」はあくまでもごくごく表面上のできごとには過ぎないのだが、早くも悲劇は他のひとびとの日常生活の実感から

切断され、ひとつひとつ確実に忘却されつつある。現代社会の日常がもたらす莫大な情報が、震災の記憶を早くも埋め尽くそうとしているのだ。

今回の大震災直後、安否確認や新たな情報交換の手段として、ソーシャルメディアやIT企業のさまざまな取組みが脚光を浴びた。筆者もそうした傾向をいち早く賞賛したひとりであった(西田亮介「ソーシャルメディアは何ができたか? 危機」から立ち上がった『新たな縁』『中央公論』二〇一二年五月号など)が、最近「ネットワークの記憶」とでも呼ぶべきものが気にかかっている。果たして、なにを紡いで、なにを忘れていくかを選択する基準と方法は変わっただろうか。

確かにここでは新しいメディアとその特性を活かした情報の拡散と交換が行われ、平時時ではなかなか手を取り合えない個人や組織のあいだの垣根も取り払われたかにみえた。携帯電話の世帯普及率は九割をこえ、その多くがインターネット

接続機能を有している。若い世代を中心にさまざまな世代がメールのやりとりをし、面白い対象をみつけては共有する。ソーシャルメディア・コンサルタントとして知られる株式会社ループス・コミュニケーションズの斉藤徹も『imedia』のエントリ内で取り上げているように、非公式の草の根メディアであるソーシャルメディアへのアクセスが震災を機に激増した。こうしたリアルタイムに、とめどもなく拡張されたダイナミックなクチコミ情報のもとに人々が協働し新たな価値を創出する様は、ながらく情報社会として構想されてきたひとつのビジョンが結実したととらえることもできる (<http://blogs.imedia.co.jp/saito/2011/04/mixi-twitter-fa-088b.html>)。

だが、震災から三カ月がたったいま、情報の拡散では解決できない問題もまた新たに目につき始めた。以下、六月一日の早朝に、Twitter上を飛び交っていたひとつの言説である。

枝野官房長官は一五日午前の記者会見で、東京電力福島第一原子力発電所四号機で火災が発生。「使用済み核燃料が熱を持ち、そこから水素が発生して水素爆発が起きたと推察される」と発表。爆発は一四日の深夜から未明にかけてライブカメラで確認できる。しかし、メディア等ではあまり報道されていない。

このメッセージは一〇〇人以上に転送された。ところが、六月一日の首相官邸のウェブサイトの「官房長官記者発表」記録をみても、枝野官房長官がこうした記者会見をした記録は残されていない。そもそも上記のメッセージは、一日の早朝に広まり始めたが、一日の定例記者会見は午前十一時に予定されていた。さらに、ネットにのこされた震災に関する記録をたどっていくと、「六月一日」ではなく「三月一日」に、福島第一原子力発電所四号機で、水素爆発と火災が発生したことに思い至る。こうした情報を総合すると、どうやら「六月一日」には火災も、水素爆発も起きていないだろうということが推察される。

だが、よくよくもう一度先のツイートを読み返してみると、その文章にはどこにも、「六月一日」とは記されていない。ただ「一日」とだけ記されているのである。その点をして「たまたま六月一日に発せられただけ」と強弁することもできなくはない。状況を総合すると限りなくデマにちかいし、少なからぬ人々が不安感を覚えたことは間違いない。しかし、真意を断定しようとする試みは、数多の過去の事例を思い起こすと徒労に終わる可能性が高い。なによりこのメッセージを流した人物を糾弾したところで、本質的な問題の解決には結びつかない。一度流れた情報を「なかったことにする」ことはできないのだ。

「デマ」は、慣れることで大抵見分けることができるようになる。繰り返し使われるパターン化した言説や、定番のオチがあるからである。ところが、災害や原発に関わる「デマ」の場合、なまじ慣れすぎることにも問題がある。いざ、本当に火災や爆発がおきたときに、自分の見たい情報以外は見ないという習慣がついてしまっていると即応できないからだ。また人の欲望や期待が複雑に絡み合った非公式の感情が言説としてまったく飛び交わない「クリーンな情報交換の場」が生じたとすれば、逆にどこか不健全にも見える。

いま、私たちはソーシャルメディアのような情報生成力が高い環境が生み出した情報爆発のメリットとデメリットに直面している。あらゆる情報について先のような複数の情報源から検証作業を行う手間をかけることなどではしなないからである。どこかで切断の作業が必要になる。それはどうか。あるいはデマと真実、悪意と誤解がいっしょくたになった世界のなかで、私たちは有用な選択肢を見出すことができるのか  
が問われている。

こうした問いに対する定番の「解」は次のようなものである。すなわち、アクセス可能な情報量の増大に対して、人間が認識可能な情報量が一定であるがゆえに、機

械処理に頼らうというものである。ポピュラーな具体例のひとつが「検索」であり、複雑性を一定の範囲——たとえば、検索画面一枚分——に縮減する。その際にはGoogleが検索エンジンの基本アルゴリズムに据えていることでも知られる。「ページ・ランク」と呼ばれるような手法をもちいて、対象の信頼度をリンク数によって計算し順序づけ表示することで、情報の信頼度を擬似的に確定するのである。「Web2.0」と呼ばれたブログ生態圏 (blogosphere) 等のパーマリンクによって構成された限定的な情報量の増大に対しては、有効に機能するように思われた。

通常不可視なウェブページのリンク数をもとにサイトの信頼度を擬似的にでも可視化することで、検索の精度は飛躍的に向上した。それまでポピュラーだったディレクトリ検索とよばれるおもに人力に頼ったカテゴリ検索をボリュームで圧倒してデファクトスタンダードとなった。だが、機械的な方法は、検索上位サイトへの自己言及的なアクセス数の増加といった問題も生み出した。つまり、リンクが集まっているサイトは、検索の仕組みからしてアクセスが集中する。アクセスが増えると、リンクもまた増加する。ある「きっかけ」から検索が集中したサイトが検索上位に表示される。機械的な検索で上位にこない情報を閲覧す

することもできるが、それらはごちゃっとひとまとまりになっており、細かく区別して欲しい情報を得ることは難しい。検索ワードを変えながら、複合的にたどり着くしかない。

こうした「解」では、先にとりあげた言説のような「多くの人が誤って、意図せずリンクを貼ってしまうような状況」には対処できない。さらに携帯電話やソーシャルメディアといったリアルタイムかつ拡散性の高いインフラが、爆発的に情報を複製、生成してしまうような状況では、「一見確からしいため、リンクが集まってしまった情報」ほど人が鵜呑みにしてしまう。機械的な検索技術は、世界の複雑性縮減に成功したかにみえて、実は未だ本質的な解決にはいたっていないのではないかと。

正確さの象徴のような情報としばしば比較されるものに「記憶」がある。記憶は、いわゆる状況の複雑さを縮減度合いに応じた定量的に計測可能な情報とは違った特性を持つ。また記憶は確定的ではなく、変幻自在である。記憶は、いざというときに再加工されて、利用者が意識せずとも浮かび上がってくる。時間が経つにつれ変化し風化する。あるいは主観的に変形されたかたちで思い起こされることさえある。往々にしてそれは想起する側にとっていいように組み替えられる。だが、状況に応じて、想

起するものにとつて常に有利なかたちに変化することこそが記憶の強みでもあるのではないかと。

情報が進むに連れて、記憶の地位は低下すると思われる。大容量の記録装置が記憶の代替物と化したり、もはや詰め込み教育は時代遅れになった、と。情報を大量に蓄積しさえすれば、記憶は不要になるようにも思われた。

だが、記憶が継承されることが重要な局面は間違いないとある。

先日、災害復興にかかわる調査の仕事で、ある地方自治体を訪ねた。過去の災害復興における行政の取組みを棚卸することが目的であった。事前のアンケートで電話をかけたときから「当時の担当者はすでにいなくなっているので、資料以上にお話しできることはない」と断言されてはいた。それでも現地に赴いたのだが、目の前には五冊の時系列でバインダーに閉じられた紙の資料と二冊の報告書が積まれた。現存するすべての資料ということらしい。過去の記憶を継承する回路は、もはやこの組織に残されてはいなかったのである。

こうした問題の解決はただ組織が蓄積した情報をデジタル化すればいいという話でも、文書を公開すればいいということさえない。文書は読み解く人材が流動化し、文脈が変化すると理解することはむしろかしい。現に新潟県の震災は数年前のことで、

行政文書は比較的読み慣れているはずだが、時系列に並べられた文書から読み取れた記憶はその文字量に比べてあまりに少なかった。

これらのことが示唆するのは情報過多な時代の希少性の源泉は、もはや情報それ自体から、情報を構成する環境や、「記憶」へと移りつつあるということだ。だが、システム自体が柔軟さと流動性を兼ね備えたネットワーク社会のなかで、どのようにして同じく不確定かつしなやかな記憶を継承していくかという課題は、依然として未解決である。これまでも、個人の記憶（暗黙知）、組織の記憶（形式知）についての議論はあった。ソーシャルメディアによって、人と人、あるいは人工物との間で生じる情報量が格段に増え、従来主流とされてきた情報の水平展開にくわえて、継承といういわば垂直方向への広がり为主题化してきた。これまでICTの進化は、なかば技術決定論的に、技術開発によって押し切ってきた側面も否めない。今回も同じように、想像もつかないような技術によって克服されるのだろうか。半ばそうあってほしいとも思いつつも、人間が選択にかかわる以上、人間抜きの議論は成立しないようにも思える。

独自の復興支援活動を手がける「ふん

ばろう東日本支援プロジェクト」代表で、早稲田大学大学院講師の西條剛央は「縁」をつくり、絆を作ることが「忘れないこと」への第一歩だと述べている（「西條剛央さんの、すごいアイデア」

『ほぼ日刊イトイ新聞』<http://www.1101.com/funbaro/2011-06-22.html>）。

一見、人は本質的に忘れる生き物なので、絆という最新の技術の外部にある根源的な関係性を述べているように読めるかもしれない。こうした論調は、ともするとITを否定し、「人間的な関係性」を美化する立場へ短絡しがちだ。だがそれは違う。

「ふんばろう東日本支援プロジェクト」は、被災地にゆかりのある人たち、思い入れの強い人たちから徐々にソーシャルメディアをきっかけにつながって広まった。生身の関係性／技術の関係性を切り分けることは不可能で、いまでは重層的に積み重なっている。

そう捉えると、人と技術、人工物の関係性が織り成す総体としてのネットワークの記憶の継承が問題となるのではないか。

そして、このことは、ITがごく一部の感度の高い人たちを除くと一般化していなかった、一九九五年の阪神淡路大震災の復旧復興過程において既に提示され、未解決のまま残存している問いでもある。

かくして、方法論に重きをおきつつ、理論面においても「ネットワークの記憶を紡

「ぐことはいかにして可能になるのか」という問いが、目下の関心となっている。

〈続く〉

---

西田亮介（にしだ・りょうすけ）

専門は、地域社会論、情報社会論、社会起業家論。さまざまなメディアに寄稿するとともに、多くの実践も手がける。独立行政法人・中小企業基盤整備機構リサーチャー、東洋大学経済学部、デジタルハリウッド大学大学院非常勤講師、慶應義塾大学政策・メディア研究科後期博士課程。

ブログ <http://web.sfc.keio.ac.jp/~ryosuke/tippingpoint/>

Twitter: Ryosuke\_Nishida